《新刊紹介》

高校国語科教育の実践課題

野宗睦夫著

一九六四（昭和三九）年の『高校国語教育——実践報告』に次いで上梓された、この深い洞察と重い蓄積に満ちた書の内容は次のとおりである。

序文（野地潤家）
はじめに
I　高校国語科教育の実践基盤
一　「現代国語」の性格——実践の立場からとらえた——
二　国語学習指導における学年の基本視点の設定
三　「現代国語」のめざす学力——論理的思考力の場合——
四　高校古典の学習指導目標
五　古典教材の新しい視点を探る
六　「国語I」に関する三つの提案
II　高校国語科教育の実践課題　その一　学習指導の変革
一　学習意欲を高めるために——国語科の場合——
二　学習意欲を高める指導過程——論説文教材を中心にして——
三　「古典」の学習意識
四　読むことと書くこととの関連指導——指導の類型——
五　書く作業を学習過程の中でどう生かしたか
六　小説教材の指導がどう変わっているか——高校国語教育を変革する基盤を求めて——
七　読書指導にかかわる問題点
III　高校国語科教育の実践課題　その二　個の力をひきだす学習指導の試み
一　グループ作業の指導計画と実践——七六年度「現代国語」二年の学習指導——
二　グループで作文を書く
三　単元「文学を書く」の展開
四　単元「文学に表れた戦争」の学習指導
五　「古典II」における「源氏物語」の学習指導——学習指導のねらいが学習者にどう受けとめられたか——
六　漢詩の学習指導——想像力を養うための翻訳——
IV　高校国語科教育の実践課題　その三　学習指導記録の方法と実態
一　学習指導を記録する方法
二　カード法による国語教材研究の実態
三　「国語学習指導級」「国語学習指導表」「国語学習計画表」——尼道東高一九五三年度入学者の三年間——
あとがき

この書の中には、高校国語科教育のほぼ全領域にわたって、実践の軌跡が綿密に記されている。わけても、私にとって教えられるところの大きかったのは、野宗先生が「実践」の場にしっかりと足を下ろし、自らの立場を貫きながら発言されているところであった。たとえば、この書のなかではもっとも古い

時期の論考である、「『現代国語』の性格」という節のなかにこうある。

「私は、指導要領とか国語教育理論とかを離れて、あくまで実践の中から浮かび上がったことをとりあげたいと思う。」（P4）

実際、この論考のなかには、「実践」の場でなくては得られない資料に基づいて、「現代国語」の有する困難さの核心がしっかりと剔り出されている。

そういった明確な問題追求の姿勢とともに、この書の中には、先生が「実践」のなかで見出されたことがらがまた、珠玉のようにちりばめられてもいるのである。

「ある時には、大きな声を出したい、怒りをぶちまけたい気持ちを抑えて、作業をさせてみることも必要だと思う。たとえば、八三年度の「国語Ⅰ」で「高校生活を考える」という作文の単元を実施した。この時、文章を書く事前の指導として、作文メモを書かせる時間があった。五十分間の中の、はじめの二十分間は耳をおおいたくなるような騒がしさであった。しかし、二十分過ぎたころからシーンとなって、四十分過ぎまで続いた。終わりの十分は、もう最初の騒がしさとは違ったざわめき程度であった。二十分間は、鉛筆の音だけしかしない場が作れたわけである。おさえつけた、白けた静かさでなくて、熱中する静かさが作れたのである。こうした熱中する静かさを持った学習の場をどうすれば作れるかを、もっと考えなければならない。」（P62～3）

先生自身の経験に根ざした発言であるだけに至って重みがある。と同時にこの件りからは先生の人間味の通った授業の場が見えてくるような思いがするのである。この書の至るところに、教師としての経験のなかで生徒たちと直に触れていかれるうちに、先生御自身の抱かれたものが、こういうかたちで表出されている。それがまた本書の大きな魅力となっていることも確かである。

最後にどうしても触れておかなければならないのは、本書第Ⅳ章で述べられている「カード法」のことである。

「一九四八年十二月に野地先生によってカードの目を開かれてから三十年以上経過した。私の場合は研究の場でなくて国語教育の実践の場でカード生活が展開した。このことは私自身も思いがけないことであったし、見通しもほとんどないままに自己流にしかやりようがなかったことである。三十年の国語教師をした私の生きた証しとして三百のカードの袋があり、二万枚になろうとするカードがあることは恐ろしくさえある。黒ずみ、変色したカードの一枚一枚にも消しようがない私の実践の記録があり、その実践を受けて今日の私の実践が存在していることを感じるからだ。いまさら引き返すことのできない道を歩いていると痛感する。」（P334）

私自身、国語科の学部三年生のとき、野地潤家先生の講義をとおしてはじめて野宗先生の名前を知った。「カード法」による実践記録のことを知ったのもそのときであり、圧倒される思いを覚えたことを今もって忘れることはできない。

この重い書を前にするとき、私もまた「はじめに」の冒頭に記された先生の短歌の中の「我」とならずにいられないのである。

「この道をひたに歩みし人ありて面影秘めてたどり行く我」（Piii）

（A4版、三六〇ページ、一九八六（昭和六一）年一〇月一五日、溪水社刊、四五〇〇円）

（山元隆春）